

自転車産業振興協会・阿部毅一郎会長に聞く

「人生を楽しむこと、それがモットーです」



「同質の渦社会を是正し、社会構造を変革すべきだ」と語る阿部会長

実に面白い方が来た———と言ったら、いささか失礼な表現になるかも知れないが、とにかく財団法人自転車産業振興協会は型破りの会長を7月1日付で迎えた。阿部毅一郎氏である。東法学部を卒業後、通産省、経済企画庁などエリートコースを歩みつつ、その一方で推理小説、エッセイ、自伝を執筆し、俳句、詩歌、水彩画、囲碁を楽しみ、スキー、テニス、長距離ドライブなどのアウトドアスポーツにも人一倍親しんできた多才、多趣味な人である。閉塞感を断固振り払い、自転車ワールドの活性化に向けてダッシュしたい日本の自転車業界にあつては視野が広く、斬新な発想ができる超前向きなリーダーが不可欠だ。阿部新会長にインタビューした。

（本誌・高木）



阿部会長の自作・水彩画

「自転車は文明のバロメーター、 豊かなライフスタイルを提案せよ」

多芸多才、多趣味、自らの価値観
に忠実な型破りの新会長

―会長室に飾られている水彩画は自作
とお聞きしていますが。

「そうです。余暇を見つけては絵筆
をとるようにしています。僅かな時間
でも毎日つづけていると何とかかたち
になってくるものです。継

続は力なりなんて言われます
けど、まさにそうじゃないで
すか。私は人生を可能な限り
楽しみたいし、そのために仕
事も一生懸命頑張るという考
えなんです。人間、好きなこ
とに打ち込むことが一番大事
なんじゃないでしょうか」

―推理小説や作詞、短歌、俳
句などもかなりの腕前のよ
うですが。

「それほどでもないんです
が、推理小説は『オール読物』
の新人賞候補になったことが
あるんですよ。ちょっと自慢
させていただくと私の出身大
学（東大）の第一応援歌『闘
魂は』は私の作詞なんですよ。



会長室には自作の水彩画が飾られていた。海外赴任の体験を反映させた作品が多い

―最相さんと言えば、競輪で不世出の
逃げ屋（先行選手）とうたわれた高
原永悟さんの足跡をたどった『高原
永悟・逃げて生きた』という本も書
かれていますね。

「それは知らなかった。今度、私は
自転車の世界に入ってきたわけですか
ら、それも何かの縁ですね。その本は
是非読ませていただきます」

同質社会構造を否定、自転車業界 の閉塞感打破へ独自理論の実践へ

―それにしても阿部会長はこれまで通
産省を皮切りに激務をこなされてき
たのですが、プライベートの世
界でも多彩な趣味を持たれ、しかも
それぞれがかなりのレベルに達して
います。実に多才というか、なか
か普通の人には出来ることじゃない
と思うのですが。

「そんなことはないのですが、私は
自分自身の自由時間というか、個人
というものを大事にするということに
努力はしているつもりです。私は通産
省勤務時代にポーランドに赴任するな
ど、ヨーロッパで仕事をする機会が多
かったのですが、向こうの人は仕事と
プライベートをきっちり切り離します
よね。定められた範囲で長期休暇も
しつかりとりますし。そういう生活習
慣、社会風土の中から個人というもの
をしつかりと確立していますよね。そ

ういう考え方を基盤として個人、ある
いは社会における本当の豊かさという
のが培われていくんじゃないでしょ
うか。

日本の社会構造というのは同質の渦
社会みたいなものです。会社組織、あ
るいは日本自体が同じ方向性を持った
渦を形成していて、異質なものをそ
から締め出すような構造になっている
と思うんです。そこではなかなか個と
いうものを確立しにくいですね。クリ
エイティブな人間が育ちにくい。日本
がもつと精神的に豊かに、柔軟に、逞
しくなっていくためにはそうした単
一方向性の渦社会を打破し、社会構造
を変える必要があると思っているん
です。座標軸の転換が必要です。

私自身、通産省に入ってからまもなくの
頃、二十代半ばでしたが、それこそ寝
る暇もないくらい働きずくめの時代が
ありました。それは大げさじゃなく死
ぬか生きるかという体験でした。そう
いう仕事を続けていたら間違いなくつ
ぶれてしまったでしょうね」

―自分自身を大切にすることから生き
る活力も生まれてくると。

「そうですよ。人間が人間らしく生
きられる社会構造をつくるっていう
ことが大事なんですよ。個人がそれぞ
れの楽しみを追求できる時間と空間を
持った社会構造をつくっていくけるよう
努力していきたいですね。そんな視点
に立って考えてみると、自転車という

「爽やかな風を感知でき、命の大切さがわかる自転車は実に素晴らしい」



「自転車の需要構造を変えていくことが大切です」と阿部会長

のは実に人間にとって素晴らしいツールだと言えます。自転車に乗れば空気の流れ、風の爽やかさを心地よく体感できますよね。自転車は命というものを感じさせてくれるツールです。私、以前から故加藤一さん（元競輪選手。パリに住み、レース風景をはじめ自転車の疾走シーンを描き続けた）の絵が好きで、個展も見に行ったりしてましたけど、加藤さんは自転車の創り出す風の動きを巧みに表現されていましたね。

それはともかく日本では通勤や通学、買い物といった実用的な生活の中で自転車が使われることが多いのですが、レジャーとかスポーツといったシーンでもっと自転車が選択されることが増えてもいいと思いますね。自転車がどういう使われ方をするのかというのは文明のひとつのバロメーターのような気がします。環境問題の観点から言っても自転車は人類に望ましい乗り物です。自転車を尊ぶ社会の実現に努力していきたいですね」

「20世紀がモーターゼーションの時代ならば、21世紀は自転車の時代と言えるんじゃないでしょうか。是非そうありたいものです。」

「最近、高島俊男さんが書かれた『百年のことば』という本を読んだのですが、その中に中国では1900年、つまり20世紀の最初の年の世相を代表する言葉は『脚踏車』、すなわち自転車だったことが紹介されています。それから100年ちよっとたった現在、中国ならずとも21世紀の幕開けを飾る言葉の中に自転車も登場しているんじゃないでしょうか。環境、健康、レジャー、スポーツといった切り口でね。ですから、もっともっと自転車が脚光を浴びていいはずですよ」

「自転車は時代の追い風を受けているわけですからね。」

「そうですね。日本でももっと自転車の有用性が見直されてもいいんじゃないかな。そのためには自転車の世界の人が充分に自転車の楽しさを自ら体験し、自転車の魅力を伝える努力をしていく必要がありますね。毎日、毎日、自分のまわりの人に自転車に乗る楽しさをアピールしていくことが大事です。残念ながら日本ではまだまだ一般の人が自転車の良さに気づくシーンが少ないうえに、街づくりといったこともっと自転車が活用されてもいいですね」



秋光翔のペンネームで上梓した『文化としての日本的経営』



ポーランド赴任中の思い出を綴った『チビクロの冒険』。装丁に使われている表紙の絵も自ら描いたものだ

よね。今のままでは地球環境は悪化する一方で、ますます異常気象が続きますよ。それを防ぐ意味でも排ガスのない自転車の役割は重要です」

「そうしたことを自転車業界の人がもっとアピールしていかないと。」

「自転車の素晴らしさを訴えるためのいろんな機会を利用し、自らもそうしたシーンを少しでも多くつくりだしていきたいものです。自転車に対するシンパを増やす努力をつづけていくことが大切です。何しろ自転車は2歳から80歳、人によっては90歳くらいまで使える乗り物ですからね。それに自転車は共に話し合える国際共通語的な要素がありますね。私は90年代の初め頃、長期休暇をとるとヨーロッパを車で旅



取材の途中、将棋の米長邦雄永世棋聖（中央）が阿部会長（右）を表敬訪問。左は桂正洋専務理事

行したんですが、スコットランドあたりを走っていると自転車とかりカンベントで悠々と旅している人に会いました。偶然、同じ人に何度も会ったりしましたね。彼らは休暇をとってリカンベントで旅していたんです。何というか、親近感をととても感じました。彼らは自転車とかりカンベントの楽しさを満喫していたんでしょうね。今、改めてそんなことを思い出すにつけ、日本人のライフスタイルがもっとレジャー

の分野で自転車を楽しむものになればいいなと思います。そうなれば自転車の需要構造が自ずから変わってくるはずですし」

新発想の導入を重視、需要構造の変革に全力投球の構え

「現在、日本の自転車業界は生産、販売の両方で閉塞感がありますが、これを打破するには需要構造を変えていくことが不可欠ですね。」

「7月に就任したばかりなので、詳しいことは分かりませんが、基本的にはそういうことだと思います。時代は変化していつていくわけですから旧態依然とした発想ではなかなか展望は開けないんじゃないでしょうか。そのためには自転車業界の1人1人が行動する、活力のある需要創造に向かって努力するというのが大事です。敗北主義になったら駄目ですね。自転車そのものは先ほども申し上げたように時代の要請というものを受けているわけですから、努力次第で道は開けるはず。」

ものづくりということに關しても日本の得意分野、技術を活かしていけばまだまだ発

展の余地は充分にあると思います。輸出ということだつて充分に可能性があるんじゃないでしょうか。過去を悔やんだり、将来を必要以上に心配したりしていてもしょうがないわけで、人生は今、現在しかないわけですから、重要なのは今をどう生きるかということです。今を精いっぱい生きるといこととですよ」

「そうしたことの積み重ねの中から明日への展望も開けてくる」と。

「と思います。前向きに人生と向き合い、自分の生き方を見定め、自分の価値観に忠実に生きる。そうした中で人生を楽しむということが大事なんじゃないでしょうか。そのことを自転車の仕事にたずさわっている人達が実践し、自転車を取り入れた充実したライフスタイルを世の中の人達に提示していくという姿勢が求められていると思います」

「日本の自転車業界ももう一度、原点に立ち返る必要がありますね。」

「自転車で乗る楽しみを自ら味わい、そうしたライフスタイルを一般社会に広めていくということでしょうか。常に新たなことを提唱する勇気を持ちたいものです。また、自転車協会が9月1日から導入するBAA制度も、自転車のマイナスイメージを払拭し、プラスイメージを定着させるためのもので、自転車業界発展の基盤となるもの

です。自振協も安全対策推進事業の一環として全力投球します。定着させるまで多少の期間を要するでしょうが、是非でも成功させねばなりません」

「好きな言葉とかは。」

「私は言葉遊びが好きで、自分の名前に引っかけ『焦（あ）』せらず勉強（べんきょう）、氣長（きなが）に生（い）きて、血（ち）の湧くロマン（ろまん）の詩（うた）も忘れず』ということ言ったりするのですが……。それと、エビキュロスの言葉の『自足の最大の収穫は自由である』ですね。自由ということ大事にして生きたいものです」



●阿部毅一郎（あべ きいちろう）昭和15年1月、長崎県島原に生まれる。64歳。38年、東京大学法学部卒。同年、通商産業省入省。50年、外務省在ポーランド日本大使館一等書記官。53年、中小企業庁長官官房調査課長。56年、経済企画庁総合計画局計画官。60年、大臣官房調査統計部統計解析課長。61年、中小企業事業団総務部長。63年、札幌通商産業局長。平成元年、大臣官房付・退官。同年、西部石油顧問。同5年、同社常務取締役。同14年、上五島石油備蓄(株)専務取締役。同16年7月1日、(財)自転車産業振興協会会長に就任。